

ウェビナー傍聴レポート
REDD+信用カスコア：CCQIによるウェビナー
REDD+ Credit Quality Scores: Launch Webinar by CCQI

（一社）海外環境協力センター（OECC）

- 日時: 2024年7月2日（火）23:00–24:00 JST
- 場所: オンライン（Zoom）
- 主催: the Carbon Credit Quality Initiative (CCQI)
- スピーカー: Pedro Barata (Environmental Defense Fund: EDF), Felix Fallasch (Oeko-Institut), Dr. Lambert Schneider (Oeko-Institut)
- 参加者数: 不明
- 録画と発表資料: https://carboncreditquality.org/media_multimedia.html
- 概要: カーボン・クレジット・クオリティ・イニシアティブ（CCQI）は、炭素クレジットの品質を評価するスコアリング・ツール（<https://carboncreditquality.org/scores.html>）を公開している。このウェビナーでは、CCQI のスコアリング・ツールの構成とツールを使った品質評価の方法を解説し、REDD+ の新しい方法論（VM0048）から創出される炭素クレジットの品質に関する調査結果について発表した。54 の管轄区域を仮定して分析した結果、VM0048 の下では、一部の国では排出量削減のベースラインが大幅に過小評価され、他の国では過大評価された。極端な例では、カメルーンのベースラインは 200%過小評価され、ウガンダのベースラインは 50%過大評価された。最後に質疑応答を行い、参加者から CCQI の調査方法（ベースラインやバッファの取り扱い等）に関する批判や質問が述べられた。

- [Pedro Barata, Environmental Defense Fund: EDF]
- ✓ CCQI は Environmental Defense Fund (EDF) 、World Wildlife Fund (WWF-US)、Oeko-Institut が共同で設立した NGO で、自主的な炭素市場の透明性と完全性を高めることを目標としている。CCQI は独立した公的市場の専門家や、[Carbon Limit](#)、[Greenhouse Gas Management Institute](#) などの有名な炭素市場のコンサルティング会社数社と技術的評価に関する提携を行っている。国や企業、個人投資家など、炭素クレジットの品質に関心のあるすべての人々を対象に、炭素クレジットの品質に関する情報を無料で提供している。
- ✓ CCQI ウェビナーでは今年から森林スコア・シリーズを開始し、2024年2月に開催した第1部では、改善された森林管理と商業植林に関するスコアを発表した。本日の開催する第2部は、「プロジェクトベースの回避可能な森林破壊（REDD+）」に関連する品質リスクがテーマである。
- ✓ 過去数年間、この分野は物議を醸しているが、IPCC が提示した GHG（温室効果ガス）削減シナオリのほとんどにおいて森林が重要であり、熱帯林の消失を止める必要がある。そして炭素クレジットは森林伐採を抑制するために重要である。
- ✓ GHG の影響と社会的影響の両方の観点から、炭素クレジットは十全性が求められており、私たちは、

クレジットに内在する可能性のある品質リスクをすべて特定したいと考えている。

- ✓ CCQI は炭素クレジットを技術レベルで評価し、個々のプロジェクトは評価しない。炭素クレジットのバイヤーやトレーダーは、デューデリジェンスの一環として CCQI のスコアを利用することができる。
- ✓ CCQI は Verra の REDD+ の最新の方法論 VM0048 に関して評価を行ったので、今日のウェビナーではその結果について発表する。

■ [Felix Fallasch, Oeko-Institut]

- ✓ CCQI は個々のプロジェクトではなく、クレジットのタイプを評価しており、①プロジェクト・タイプ（森林管理や森林伐採回避など）、②カーボン・クレジット・プログラム（Verra、Gold Standard など）、③量的技術、を評価要素としている。また、ホスト国やクレジットの発行機関も考慮している。
- ✓ 品質評価に関しては 7 つの対象（Objectives）がある。①GHG 削減効果の正確な評価、②追加性と削減インパクトの正確な評価、③二重計上の回避、④持続性の確保、⑤ネットゼロへの移行の促進、⑥持続可能な開発への影響、⑦カーボン・クレジット・プログラムの制度的枠組み。
- ✓ 20 の基準（Criteria）、サブ基準（Sub-Criteria）を使用して品質評価を行い、5 が最高スコア、1 が最低スコア。各基準は、加重平均を用いて総合スコアを算出しており、少数の（サブ）基準が優れていることで全体として良いスコアになってしまうことを回避している。
- ✓ 例えば対象の 1 つである GHG 排出削減効果の正確性に関するスコアは 2 つの基準、追加性と頑健性から構成されており、さらに脆弱性も考慮されている。追加性の基準の下にはプログラムレベルで実施国の法制度に適合しているか、等のサブ基準が設定されている。
- ✓ CCQI はこれまでに主要なカーボン・クレジット・プログラムの 14 のプロジェクト・タイプ（調理ストーブ、再生可能エネルギー、植林、REDD+、埋立処分場のメタン回避など）と、2 つの補完的な基準、CCBS（Climate, Community & Biodiversity Standards）と SD VISta を評価している。
- ✓ 森林プロジェクトは次の 4 タイプに分類している。①天然林と商業植林、②改善された森林管理、③計画されていた森林破壊の回避、④計画されていない森林破壊の回避
- ✓ 追加性に関しては、①プロジェクト・タイプレベルでの財務的な付加価値と当該国の法制度への適合を評価し、②カーボンクレジットが必要とされる財務的理由の有無を評価している。
- ✓ また、飢餓をゼロに（SDG2）、水と衛生（SDG6）、生態系の保全（SDG15）などの持続可能な開発目標への貢献を評価し、地域社会や環境に対する潜在的な負の影響を考慮している。
- ✓ 負の影響を避けるためには、強固なプロジェクト・デザインと環境社会影響評価が重要であり、カーボンクレジットの削減インパクトを正確に決定するためには、質の高い方法論が重要である。

■ [Lambert Schneider, Oeko-Institut]

- ✓ Verra の REDD+ の 4 つの方法論「VM0006、VM0007、VM0009、VM0015」と 2023 年 11 月にリリースされた新しい方法論 VM0048 を評価の対象とした。
- ✓ 既存の 4 つの方法論は VM0048 に置き換えられる予定。また既存の方法論は「計画されていない森林破壊」を対象としているが、VM0048 は「計画的な森林破壊」にも適用される予定。
- ✓ 既存の方法論は、将来の森林破壊の不確実性が高く、排出削減量の基準設定が困難だった。参

照地域を使用して過去の森林破壊率をもとに基準（ベースライン）を設定していた。

- ✓ VM0048は①全体の管轄区域における総森林破壊を設定し、②管轄区域内の各ピクセルに森林破壊を割り当てる、という2段階でベースラインを設定している。また、プロジェクト開発者がベースラインを設定することを排除し、Verraがデータ提供することになっている。
- ✓ VM0048の利点としては、管轄区域の目標とクレジットの整合性を確保していることと、恣意的な参照地域の選択を排除したことがあげられる。
- ✓ ベースラインの計算に割引係数が含まれており、定義上、ベースラインは保守的なものになる。
- ✓ また、データの不確実性をより体系的かつ包括的にカウントしている一方で、ベースラインシナリオの不確実性を考慮した調整は行われていない。
- ✓ VM0048では、管轄区域における過去10年間の森林破壊率を評価し、その地域内で樹木損失が大きい場所をハイライトし、その後、森林破壊率が今後6年間続くと想定している。6年間のベースラインの有効期間が終了した後、森林破壊の変化を考慮してベースラインが再評価される。実際の森林破壊とベースラインを比較する為、過小評価や過大評価が生じる可能性がある。すなわち、長期的に森林破壊が減る場合、ベースラインが過大評価される可能性があり、逆に長期的に森林破壊が増加する場合、ベースラインが過小評価される可能性がある。
- ✓ 54の管轄区域を仮定して分析した結果、新たな方法論の下では、一部の国では排出量削減のベースラインが大幅に過小評価され、他の国では過大評価された。極端な例では、カメルーンのベースラインは200%過小評価され、ウガンダのベースラインは50%過大評価された。
- ✓ ベースラインが過小評価されている管轄区域のプロジェクトは、おそらく実施されないか、十分な炭素クレジットを作ることができないため、プロジェクトデベロッパーが追加的なコストの支払いを余儀なくされる。対照的に、ベースラインが過大に見積もられたプロジェクトは、より多くの炭素クレジットを創出できるため、より低い価格でより多くの炭素クレジットを提供できる
- ✓ 既存の方法論は排出削減を過大評価する傾向があるが、VM0048は改善されているものの、さらなる強化が必要である。
- ✓ 追加性に関しては、いくつかの例外があるものの一般的なプロジェクトは経済的に魅力的でない場合が多い。持続可能な開発への影響は文脈に依存しているものの、管轄区域のルールとガバナンスは概ね良好といえる。

■ Q and A（主なものをだけを記載）

Q. (Naomi Swickard) : 多くの国で森林破壊が持続的に減るという傾向にはないことを見落としている。このような割合は、時間の経過とともに上昇したり下降したりすることの方がはるかに一般的。新方法論の評価は、投資なしに森林破壊をゼロにする軌道があり、排出削減量の過大評価につながると主張しているが、これは誤りである。Verraは、投資なしに森林破壊が減少することはないと考えている。また、森林破壊の傾向がある場合、ベースラインは、方法論に含まれる定期的な更新を通じて、各国のアプローチと一致するように調整され、より保守的になる。

A. (Lambert Schneider) : 重要なのは、将来に何を期待するかということ。何が起こるかかわからないのは明らかで、私たちの見解では、絶対に減少しないというのは非現実的というか、あり得ないと思う。この

方法論（VM0048）は、森林破壊が常に一定で、増加しているという仮定に依存している。ある国では増加するかもしれないが、他の国では減少するかもしれない。少なくとも減少した国では、排出削減量の過大評価が行われることになる。そこで問題となるのは、各国にとって有効な保守的な仮定とは何か、ということ。私たちは、将来的にベースラインが減少すると仮定する方がより保守的であると評価している。例えば、パリ協定 6 条のもとで、このような政策と長期目標との整合性が図られることを期待している。

Q. : 森林再生などのプロジェクトでは、将来的に「クレジットを生み出す」地域が破壊されるリスクがある。私が知っている限りでは、プロジェクトは植林された地域の一部を売却し、それを緩衝地帯（バッファープール）として使用することでその点を考慮している。アメリカでは、100 年間あるはずの緩衝地帯がすでに枯渇しかけていると聞いたことがある。このこと（緩衝地帯と未計画の影響）も CCQI の評価には含まれているのか？

A. (Pedro Brata, EDF) : 今日の発表ではこの点に焦点を当てていないが、バッファープールは、我々の持続性評価の一部に含まれている。しかしバッファープールの要件は、プログラムごとに異なり、必ずしも方法論に特化したものではない。

Q. : パリ協定 6 条 2 項の制度のもとで報告されたプロジェクトで使用された方法論を、評価する計画はあるか。

A. (Pedro Brata, EDF) : キャパシティ上の制約から、現段階では考えていない。我々の評価方法のいくつかは、パリ協定 6.2 のプログラムの文脈で使われる可能性がある。

作成：久世 濃子